

B-29 おむつの洗たく処理過程における細菌の残留(菌汚染布による) 第1報
福岡女大家政 平松園江 中村学園短大 ○中村郁子
筑豊高 児玉千寿子

目的 前に洗たく乾燥後のおむつに付着している大腸菌数を水分率と関係づけて調べたが、今回は付着菌数を確かめ、2種の洗い出し液でその洗い出し効果を検討した。更に、菌汚染布を予浸、水洗い、すすぎの各処理をし、それぞれの布に残留する菌数を調べおむつ洗いの基礎としたいと考えた。

方法 洗い出し効果の検討は、供試布:晒(4×4cm) 供試菌:proteus vulgaris OX-19 培地:普通寒天培地(pH7.0±0.1) 菌汚染布:20mlに1-ゼの割の菌浮遊液を攪拌したものを原菌液とし、a/ml:滴下した 洗い出し液:リン酸緩衝液(pH7.2±0.2) ペプトン1%+Tween80a.1%+生理的食塩水 浴比:1:100 菌汚染布を洗い出し液中で振盪(10分、30分)後、液をa/ml採取し平板培地で常法により培養しコロニーを数えた。またa/mlの原菌液を布の洗い出し液と同量の中に入れ、その消長を対照として比較した。洗たくの方法は、菌汚染布を浴比1:30の洗浄液(水、a.080%洗剤液)中で予浸30分、水洗い5分、すすぎ2回3分ずつ振盪機洗いし、各洗浄液a/ml中の菌数を調べた。また、各操作ごとの布をリン酸緩衝液で洗い出し、a/mlの液中菌数を調べた。

結果 ペプトン液は時間の経過に従い菌が増殖し、最初の付着菌数が不明な場合は使えない。リン酸緩衝液は対照液、洗い出し液中菌数と、時間の経過と共にやや減少する傾向がみられ、洗い出し効果を相殺される危険があるので振盪10分に比し、その時の洗い出し率67%(14回の平均)を考慮して残留菌を算出すればよい。菌汚染布の洗剤洗浄では菌の除去に加え制菌作用が認められ、P菌は洗剤に弱い。水予浸、洗剤予浸共に予浸の効果は大きい。水洗い液中菌数はばらつきが多く、水洗い布より洗剤洗い布の方が残留菌は少ない。